

## 輦蹙を買った話

### その1

10 数年になろうか、車椅子に乗った青年が、医師国家試験に合格した。本人も家族も大喜びで、新聞でも持て囃された。

ある大学の教授会で、直言居士がいて、「患者が急変したらどうするねん？」……居並ぶ教授たちから輦蹈を買ったという話がある。（……この時、ボクは慰安婦問題のことで、維新の議員たちが、反対を述べた西村慎吾さんを責めていたことを思い出した。むろん、西村さんの方が正しかったのだが。それは別のはなし）

これには、少し説明が必要になる。……前の病院で、隣の診察室で診察を受けていた患者さんが、突然心筋梗塞の発作を起こし、とりあえずベッドに寝かせたらしいが、ドタンバタンと板壁にぶつかって大きな音がしている。「なにしてんねん？」と覗いたら、五体満足な男が循環器の先輩の名を大声で呼んでいる。で、ボクも含めて3人で病棟に運び、AEDで蘇生させて、結局助かったことがあった。

また、医師は知的職業と考える人が多いらしいが、すでに書いたように、ある開業医の夫婦の会話のように「こいつは頭が悪いが、身体が丈夫だから医者にするか」に象徴されるように、まずは体力であり、知識はあとから追いかければいい。

ただ、この車椅子の青年を容認した大学は、それなりに対応策を考えてくれてはいるはずである。もう中堅の医師に成長されておられることだろう。活躍されていることを切に願うものである。後追いの記事がないから、詳細は不明だが。

### その2 目洗い医者

今はそうでもないようだが、昔は眼科に行けば柄のついた皿のようなもの（膿盆）を持たされて目を洗うのが普通だった。

学生時代のこと。ある島で開業されていた先達から話を伺うことになった。この先達、「都会では目洗い医者でも経営はなんとかなるが、田舎では優秀でなければならない。なぜなら、1日ばかりでバスを乗り継いでほるばるとやってきて受診する。目洗い医者では、二度と来なくなる。」

「結膜炎なのにどうして眼底まで撮影するんですか？ おかしい。」と医師会のボスのような眼科医に尋ねたのがいて、その人の表現では、みんな下を向いて知らぬ顔をしていたという。結膜炎と眼底は、何の関係もない。眼底カメラは高価なんです、としか答えられない。……その理由はおかしいのではないか。答えになっていない。

ボクの経験では、いきなり視力や眼底写真を撮影する。何の意味もない。おまけに、病歴をきちんととれば、誤診のしようもないはずなのに、「アレルギー性結膜炎」と診断された。こいつはだめだ！ オレ、アレルギーありませんで。いやいや、アレルギーですという。薬を出す係の女の子も、1日何回点眼するとも説明しない。水で洗った方

がまし。……よくしたもので、受付を始め、スタッフの出来が悪い。電話一本まともにとれない。都会では、目洗い医者でも生計は成り立つ、という見本みたいなものだった。……念のため、抗生物質の点眼できれいに治った。それなら素人のオレのほうが正しい診断をしていたことになる。……結膜が赤かったらみんなアレルギーにしていまよる。

### その3

精神障害（精神薄弱者）の人が、ボクのところに通院していた。病気はなにだったか忘れたが、それほど治療に難渋することもなく、半年ほど通院していたが、完治したようだ。たまたま隣の診察室に入ってしまったって、診察していた医師がボクを呼んでくれ、とのことで走っていったが、なんの危害もくわえるどころか、単に間違えただけのことで、笑い話ですむようなことだった。

たまたま医局でその人の話になって、先輩に説明していたところに、「患者はアホやねんやろ？（この場合、2通りの解釈があって、正常の判断力はあるが、理解力の欠けた患者さんのことを意味する場合のことが多いのだが……もうひとつは、精神薄弱者のことだが、普通はそういう表現を使うのは失礼だから、滅多に使うことはないし、ボクも使ったことはない。なぜなら、学生の頃、金剛コロニーで実習し、スタッフが懸命に働いていたのをみていたから、そういう発想に至ったことがない。それに移植がどうのこうのといった類の病気ではない）……そんなもんに移植したって……」これには、その場にいた連中が鼻白んで……。

オレたちは、そんなに偉いもんでもなんでもない。……この人の中では、「患者なんかなんぼ死んでもええ。論文の方が大事や」が根底にあるようだ。

### その4

開業してしばらくすると、前の病院で隣の研究室にいた人が通院するようになった。いろんな裏話がでてきて、ある時、「いい仕事をしているのにもったいない。英語に訳してあげるからデータを全部持ってきて」と親切に言う。で、出来上がった論文をみたら、トップネームが、英語に訳してあげる、と親切に言ってくれた人の名前になっていて、その人の業績になってしまっている。ひとりでコツコツ積み重ねてきた人の名前は、載ってはいるが「その他大勢」のなかに埋もれていた。騙されたようなものである。彼女は、当然、自分の名前がトップにあると思っていたから。

しばらくすると、今度は十把一絡げのなかの薬剤師かなにかのオネエチャンが同じようなことを言ってきて、あきれ果ててケンもホロロに追い返したのだという。最初のが悪いやつだと学習している。あとからきたのは、より性質が悪い。学びに来て教えてほしい、というならまだ人として救いがあるが、明らかな人間性の欠如ではないか。

オレは思わず、ひとりやふたりではないねんな……

## その5

大谷翔平の所属するエンゼルス。大谷が入団した時の GM は、すでに去って今の無能な GM になっている。5年間で4人も監督の首を変えているが、2022年は12連敗の責任をジョー・マドン監督にかぶせ、突然の解雇。ところが監督を変えても連敗は続く。その連敗ストッパーが大谷だけだった。ある野球解説者がいう、「連敗の責任は監督じゃなかったということですかね」・・・つまりは、GMが有能な選手を獲得できなかったことが原因である。自らの無能を棚に上げ、すべて監督の所為にする。オーナーがけちん坊で、GMはオーナーのイエスマン。たとえば、大谷の年俸は、ことし3000万ドル。トラウトが4000万ドル、レンドーンは3700万ドル。それに準じての年俸だから、そうしたのだろうが、安すぎると現地でも大騒ぎになった。トラウトは、怪我をするまで頑張ったけれども、レンドーンに至っては、今年ほとんど姿をみしていない。金の使い方がわかっていない、まるで阪神タイガースみたいな球団。

いかに有能な監督でも、駒がなければ勝てるものも勝てない。

大谷ひとりで、1試合で2000人の観客数がふえているという。入場料が60ドルとして、大谷グッズの売り上げや、おやつを売れば、100ドルではすまない。1試合主催するだけですくなくとも20万ドル以上の収入になる。年間で少なく見積もっても1600万ドルの収入になる。他の球場でも多い時には5000人以上の観客動員数の増加がある。

どこかのチームの選手が語った「10億ドルだしてやれよ」は、正しい。なぜならMLBが世界に進出（たとえばヨーロッパ、アフリカなど）したいのなら、大谷が投打で活躍している今しかない。WBCでみたように、せっかく野球をする人口がふえてきているのに、さらに根付かせて野球人気をあげておかなければ。そのためには、現在の大谷人氣が沸騰しているうちに、つまり10年あまりのうちに、何らかの手をうっておかないと、後悔することになる。

2023.11.27.